

「時の流れに想う」

住職

六月に小学校の時のクラス会がありました。私たちは戦後まもない昭和二十三年に入學しました。同級生は総勢七十人ほど。そのうちすでに十二人の方が亡くられています。

このたびは「古希の祝い」ということで、「神戸の米田君のお寺にお参りしよう」ということで、約半数の三十人が遠方より集まり、昔話に花

を咲かせ楽しいひと時を過ごしました。

参加された同級生の顔を見て、誰か名前の分からない人の多いことにビックリです。五十数年の時が流れている現実を痛感したしだいです。

私たちは、気持ちのうえでは、自分が変わってないと思っています。

しかし、年齢を重ねるとともに、身体は老化し、体型や人相、能力などは確実に変化しています。分かっているつもりでしたが、あらためて認識したような思いです。

日々刻々、変化している現実を忘れ、「変わらないつもり、変わっていないつもり」でいる、愚かしさとあつかましさに、われながらあきれるばかりです。

「自分はいつまでも変わらない」と思うのも、「いつも自分のしていることは正しい」と思い込んでいるのも、「つもり」の世界です。自分の人生は「楽をしながら過ごせるはず、思い通りになるはず」と決め付けているの

も、自分を中心にこの世は動くと思うのも、「つもり」の世界です。

「つもり」の世界は、全て自分の頭の中でこしらえた「思い込み」の世界です。現実の世界ではありません。「思い込み」は、「こんなはずじゃなかったのに」ということになります。

「思い込み」の危うさに気付かせてくださり、「今、しなければならぬ事、してはならない事、できる事」を教えてください。それが、仏さまです。

戦後六十余年の間に、社会は物の乏しかった時代から物の溢れる時代になりました。「足ることを知る」ことも、「支えあう心」も薄れて、「当たり前」という一人勝手な意識が大手を振って歩く時代になってきているような感じがします。

物の豊かさに目がくらみ、心が貧しくなっているのにも関わらず、偏見と思い上がりの中にある自分を、照らし気付けてくださる仏さまの光に遇えている有り難さをかみ締めさせてもらいました。



**東北被災地に
派遣させていただいて**

信行寺 三男 米田 秀爾

瓦礫の山、そんな中ひとときわ高くそびえる瓦屋根が目に入ってきた。ひかれるように門のそばまで行き、車を降りると「浄土真宗本願寺派 〇〇寺」とお寺の名前が。皮肉にも信行寺と同じ宗派であった。ここは、石巻市沿岸、東日本大震災で津波によりすべてが流された地区である。



**ハンカチのひよこ作りをしている
信行寺の有志方**

地震の当日、私はフィンランド、ロバニエミから車で一時間の小さな村にいた。(一年間の海外交換教員プログラムに参加中) 朝起きて、インターネットになくと、すぐ目に入ってきたのは津波の映像。フィンランドのテレビで

もトップニュース。それから毎日外から見る日本の現実言葉が出なかった。やはり日本人、自分の国のためにできることを、日本への思いを強める日々であった。

帰国後の四月十五日(金)、学校で「被災地教員派遣」募集についての話が校長からあった。月曜日の朝までに返事がほしいという急な話。それほど被災地では教員が必要だったのだろう。私の心は校長の話聞いていた時にもう決まっていた。日本中の誰もが、自分にできることはないかと考えているが、実際にできることは意外に少ない。しかし今、目の前に日本のためにできることがある。縁あってそれが私には与えられた。また、私自身阪神大震災でお寺が燃えるのをこの目で見ていた。その後、檀家さんはじめ、友達、全国からのボランティアさんなど多くの人に助けられた。その恩返しで「子ども達に少しでも多くの笑顔を」と考えた。五月二日、都庁で結団式があり、第一陣は六十八名の教員が宮城県に派遣された。そして、五月九日に現地小学校へ。何の縁だろうか、この日は私の誕生日であった。

現在、私は石巻市の小学校で、六年一組の担任を任されている。学校や地域の被害は



**ひよこのハンカチを受け取り
喜んでくれている石巻市の子供達**

ほとんどないものの、体育館は避難所になって七〇名近くの方がいまだ落ち着かない日々を過ごしている。避難所から通学する児童や、家や学校が津波の被害に遭ったために引っ越して来た児童も二十人ほどいる。また、改善されつつあるものの、給食はパンと牛乳のみと、子ども達を満足させる量とはいえない。余震も未だによくあり、子ども達の不安な気持は計り知れない。今回、信行寺において募金をしていただき、タオルでひよこを作って送っていただきました。これらは、全校児童一人一人に配ることが出来ました。ありがとうございました。ひよこの形は紐をほどけば崩れてしましますが、皆さんの思いは、子ども達に壊れることなく心に残り、温かく元気づけることと思います。心から感謝いたします。

来年三月の派遣期間まで、私は自分のできることを、精一杯させていただこうと思っています。

合掌

「第十四回世界仏教大会に参加して」

新田 光美



四年に一度の世界仏教大会があるのを知ったのは、前回のハワイ大会でした。「ハワイまで行くのー、いいなあー」と、言ったのを思い出します。四年後は日本で開催と聞いて、その時には、絶対参加したいと思ったものです。

そして今年、「親鸞聖人七百五十回大遠忌法要」がある年に世界大会が日本で開催されます。誠に幸せなことではないでしょうか。

北米・南米・ハワイ・カナダ、そして日本全国から参加された約四千人の方々が集まり、また普段お目にかかることのない、お裏さま、御門主様、新門様にお会い出来た事に、ただただ感謝していました。

スローガンである「世の中安穩なれ」この言葉の重みをひしひしと感じながら、各国の方々や、ゲストの方々のお話を聞かせていただき、皆様それぞれにご苦労があるけれど、お念仏によって心やすまられているのだと、思わせていただきました。何もかもが初めての体験だったので、本当に楽しく過ごしました。参加させて頂いた事に感謝いたします。

「親鸞聖人の七百五十回大遠忌に参拝して」

多田 文男

西本願寺において、本年四月九日より宗祖親鸞聖人の七百五十回目の御正忌にあたる来年一月十六日まで「親鸞聖人七百五十回大遠忌法要」が勤められております。私たち信行寺門信徒会の有志も、四月十六日住職様・副住職様と御一緒に西本願寺へ参拝いたしました。

法要では、御門主様、新門様はじめ多数の僧侶方と、参拝に訪れた門信徒あわせて総勢三千余人の読経が御影堂に響き渡りました。この大遠忌のスローガンは「世の中、安穩なれ」です。これは、聖人が「御恩報謝のために、お念仏こころにいられて申して、世の中安穩なれ、仏法ひろまれ」と願われたお心を体したものだそうです。それは、同じ命を生きている相手の存在に気づかず、自分中心の善悪に固執する偏見を破り、対立の構図を解消できるのは仏の知恵だけであるから、仏法が広まり世の中が安穩であることを願われたとのお心です。

人間として生きる限り、この教えを全うすることは、不可能なものに思えますが、この後は、少しでも聖人のお心に近づけるよう精進したいと思えます。

法要の終盤には、「恩徳讃」が合唱されました。それは私が幼い頃、祖母と信行寺へ幾度か通ううちに覚え、何かの拍子にふっと口から出るほどに成っていた懐かしい調べでした。

(今の曲とは違うので間違って覚えたとはかり思っていたのですが。)それは優しかった祖母を、今も身近に感じる事ができ、お寺と私を結びつける不思議な調べのように感じています。また、そんな幼い頃からのご縁のお蔭で、親鸞聖人七百回忌の法要も、中村錦之助主演の記念映画「親鸞」を鑑賞したことで、記憶に残っています。

私にとって、今日の参拝は、過去六十余年の生き様といろんな人にお世話になった思い出を振り返らせて頂いた嬉しくて有難い一日でした。

「しようまさんを訪ねて」

石田智子

六月二十九日、三十日、本年度の研修参拝旅行がありました。

四国香川県方面の妙好人の庄松さんと、法然上人の足跡をたどり、お念仏を喜ばさせていただきました。

天候にも恵まれ、参加者一同有意義な二日間でした。

庄松さんと私は同じ丹生の土居で生まれています。

そして今回参拝旅行で立ち寄った勝覚寺の檀家です。

庄松さんの百回忌にはお稚児さんで参加した事も覚えていきます。

庄松さんの言い伝えはいろいろ聞いて育ちました。読み書きできなかつた言動の中に、南無阿弥陀仏しかなく他には何もないと、伝えられています。それも、周りの人達みんなに見守られていたからこそ、今に伝えられていると思います。

当地では同行で執り行われている「お座」というのがあって、毎月持ち回りの家々でご住職様と正信偈を唱えます。十軒くらいで構成されていて、そんなグループがあちこちにありました。今思えば、とても恵まれた中にいたようです。私も訪れたことのない旧跡で、法然上人が讃岐に流され

たご足跡の法然寺、西念寺にも参拝し、ご住職様方から丁寧な説明を受けました。塩屋別院、正宗寺にも参拝できたのは嬉しいことでした。

旅の途中に乗っていたバスが動かず、代替バスで帰ったことも、私達の思うままではないことを教えてもらったように思います。それでも、誰も怪我などなく無事に帰れたことに感謝しています。



「長井筆頭総代を偲ぶ」

住 職

筆頭総代をしてくださっていた長井英治様が、さる七月一日、行年八十七歳で往生されました。

わたしが住職を継いだときに、お寺の総代になっていたいただきました。それ以来、三十数年にわたり住職のわたしをいつも支えてくださった方です。

ことに平成七年の阪神淡路大震災で全焼し、全てが灰燼になったお寺の復興には、並々ならぬお力添えをいただき、今の本堂、お内陣などの完成をみる事ができました。

大多数の門信徒のみなさまが被災されてしまったので、なかなか復興の予測の立ちにくい状況でしたが、門信徒の方々のお寺復興の願いを成就するために、筆頭総代として卓越した指導力を発揮してくださいました。感謝もうしあげます。ありがとうございます。

なごりはつきません。さまざまなことやよみがえつてまいります。

長井英治様、お浄土より帰り来て、あとに残ったわたしたち一同を導き照護くださいますように。

合 掌

妙好人「讃岐の庄松同行」

副住職



妙好人の中でも特異な言動で有名な讃岐の庄松さんは、寛政十一年に今の香川県大内町土居で生まれ、明治四年に七十三歳で往生されました。

いくつかの言行録を読んでみると、「銭の数を知らぬ」ほど、この世の事については無頓着で、妻をめとらず、世間体を気にせず、仕事も子守りや米つきなどをして、生

涯、質素な生活を送ったようです。しかし、東に西に法縁をたずね歩き、人々にありがたい法の味わいを伝えたといえます。いつからお寺で聴聞するようになったのかは分かりませんが、手次寺の勝覚寺の弟子、周天の教化で回心し、常に「周天如来、周天如来」と崇めたといえます。親鸞聖人の説かれた信心の世界を、自分自身の直接的な体験として生きることに徹していた庄松さんの言葉には、まるで禅的なものさえ感じられます。

ある人が、「一念帰命とはどういう事か？」と尋ねたところ、庄松さんはすぐ、仏壇の如来さまの前に寝転んでみせたといいます。上の絵にあるように、お寺の本堂で寝転んでいる庄松さん。普通ならば、行儀のわるい常識知らずと思われるところですが、「親のうちじや、遠慮には及ばぬ」という言葉は、まさに安心しきった子供の心持ちであり、それこそ如来様に任せきった飾り気の無い他力信心の有り様を妙に言い当てているからおもしろい。私たちは如来様や浄土という世界を、ついつい知性で理解しようとする傾向がありますが、庄松さんは自身の中に「なむあみだぶつ」として、具体的に働きかけていることを体感されているのでしょうか。

これも有名なエピソードですが、あるお寺に庄松さんが逗留していた時、その寺の院主さんが庄松さんに向かって、「撰取不捨というのはどういう意味なのか？」と尋ねたところ、庄松さんは、すくつと立ち上がって、大声をあげて手を広げたので、院主さんはびつくりして、あまりむつかしいことを尋ねたので庄松さんが、のぼせたと思つて、その場を逃げだしましたが、庄松さんはどこまでも追いかけてくる。お寺の境内中くまなく逃げ回ったあげく、行灯部屋に逃げ込んで、ここに逃げたのは分るまい、と思つてひと安心していると、庄松さんが戸を開けて、「もう逃げ場はないぞ。撰取不捨とはこれなり！」と言われた。どこまでも逃げるものを、どこまでも追っかけて見捨てぬのがまさに「撰取して捨てず」という阿弥陀という如来さまの働

きなのです。

このような奇抜な行動にでる庄松さんですが、人望厚く、勝覚寺の住職も特別に可愛がったようです。それを妬んだ、寺の役僧の一人が、庄松さんを困らすために「無量寿経」下巻を出して、「おまえは立派な同行ゆえ読んでみよ」と迫ったといいます。文字を読めないことを知ってのうえでの嫌がらせです。

しかし庄松さんは平気な顔で、「庄松を助けるぞよ、庄松を助けるぞよ、と書いてある」と答えたという。

蓮如上人が、「聖教よみの聖教よまずあり、聖教よまずの聖教よみあり」と言われています。お聖教を読んで知識として理解していても、その真意をいただいていないようならば、お聖教を読んだとは言えません。反対に、お聖教の文字を読む力がなくても、庄松さんのようにその真意のままに生きている人こそ、「聖教よまずの聖教よみ」そのものでありましよう。

そんな庄松さんが臨終の床についたときの話です。石田村の市蔵という同行が見舞いにやって来ました。庄松さんは生涯、妻をめとらず、子供もいません。彼のために墓を作った申う子孫もないので、かわいそうに思い、「同行が死んだら墓をたててあげますから、心配しなくていいですよ。」と言ったのですが、庄松さんは一言、

「おら、石の下にはおらぬぞ」と言いはなったということです。

たしかに庄松さんにとって、死ぬということは、墓石の下のような暗い所に眠るようなものではなく、お浄土という、永遠のいのちと光に満ちた悟りの世界に生まれていくことでありました。

しかし、またある日、一人の同行がたずねてきて、「どうだ、お念仏をよろこんでおるか」と言ったとき、「よろこびどころか苦しゅうておれぬわ」と庄松さん。

人間味あふれる庄松さんらしい臨終の言葉です。臨終を待つ事なく、他力の信をいただいた、その時が浄土に往生することが定まる時。苦しむ姿そのまま、大丈夫といっておられるようですね。



庄松同行銅像（勝覚寺）

信行寺行事予定とご案内

本堂納骨お盆法要

八月十六日（火）
午後二時より 本堂にて

夏期特別法座

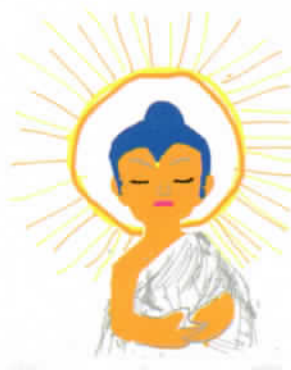
八月十七日（水）
午前十一時～午後三時
信行寺 本堂・礼拝堂にて

秋の彼岸法要

九月二十四日（土）
二十五日（日）

西大谷納骨参拝

十月十六日（日）
バスで一緒に参拝いたしますので参加希望者はお寺にお問い合わせて下さい。



編集後記

原発の事故の収束もままならない中、節電の夏が始まりました。この度、人間の追い求めてきた利便性最優先の社会には、必ず負の一面があることにも気づかされました。未来の社会を再建するには、あまりにも難問が山積みで心が痛みます。

話は変わりますが、私の家にはクーラーがありません。今までも子供達は、一日に何度も水浴びをして、扇風機の前で、氷をなめながら夏休みを過ごしてきました。今どきクーラーがないなんて・・・まわりからも熱中症のことを心配されましたが、今年もなるべく無理をせず、スロースライフで暮らしていこうと思います。

朝夕、庭に水をまき、最近話題になっている緑のカーテンを作る。幸い、風通りのよい家なので、爽やかな風が吹くときの気持ちのよさは、エアコンの涼しさとは別物です。今年は、今まで話題にもならなかった蚊帳が売れたりして、一昔前の生活が再び見直されているようです。

思えば、東南アジアでは、早朝に働き、大人も子供も昼寝をして、夜は外で人々が憩い、涼しさを満喫してきました。自然のリズムに合わせた暮らしをつい何十年まえまでは日本人もしてきました。原発問題から起こった節電により、昨年までは、考えられないことだったサマータイムが、企業で実行されたことは新たな試みとして期待しています。

一方このままでは、経済的な効率が悪く、先行きが成り立たないのが現実です。しかし、電力だけに頼る生き方しか知らなければ、未来は不安になりがちです。そうはいっても、六十年前の昭和の暮らしに戻ればよいような単純なことでもありません。未来に向けて、何が必要で何が要らないことであったのか、真剣に今一度、暮らしの中から見極めていくしかないようです。（米田 悦子）